
あの日あの時あの場所で

R Y O

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日あの時あ場所で

【Nコード】

N4109A

【作者名】

RYO

【あらすじ】

主人公の『良』の荒れに荒れた中学時代から夢をみつけた高校時代。青春真っ只中の10代を等身大の視点で描いた物語。思春期に起こるいろいろな葛藤。仲間達とたくさんの経験。仲間の大切さ、青春の輝き。大人になって忘れかけてたあの頃、いろいろあった夢！希望！もう一度思い出してみませんか？

第1話中二、夏始まり

何もかもが嫌だった。

中二の夏、髪を染めた、タバコも覚えた。ただの興味本位だ。

あの頃はそれがカッコイイと思っていたから。

それなのに親はやたらといらない心配をして気を使うし、先公はクズだの落ちこぼれだの言って寄ってたかつて頭から抑え付ける。みんながみんな自分の考えを押しつけてくる。

何が正しいかなんでわからなかったあの頃、周りは普通にしろって言うけれど、”普通にするってなんだ？”　ワケもわからない大人達の言葉や行動に俺のなかに溜まるストレスが苛立ちに変わり、その増幅され続ける感情は抑えることなどできることなく手当たり次第にぶつけた。そうしてる内に俺の周りから人はだんだんと離れていった。ほっておくのが一番いいと思ったのだろう。俺は俺でそっちのほうに住みやすいと思っていたし…。

しかし、実際はその逆で、そのせいで俺はさらに荒れた。あの頃の俺はほんとに荒んでいた…。

今にして思えばこんな俺が今日まで生きてこれたのは、あいつらがいたからだ。唯一そいつらの前では笑顔があふれる。気のあう最高の仲間たち。いつもどこでも一緒だった。そいつらとの最高の10代日々

第2部アホと憂鬱

9月の始め、夏の暑さは和らぐ気配がまったくない。ジリジリとアスファルトを照らす太陽。溶けるほどに暑い炎天下の中、ダラダラと通い慣れた道を歩く。

そう、新学期の始まりだ。休みの気分はまだ抜けない。

中学二年になつての夏休み、俺はいろいろな心境の変化があつた。髪を染めてタバコを吸い始めて。休みの毎日夜中に家を抜け出して仲間と集まって、騒いで明け方帰る。その繰り返し。とくに何をしたとかは覚えていない。タダそれだけで楽しかったんだ。

毎日がキラキラしてた。何もかもがうまく行く気がしてた。

学校が始まるのはホントにだるい。朝も早い。まだ寝ていたい。休みが名残りおいしい。でもこればかりは仕方がない。

足取り重たく、学校へむかった

俺が通っている中学は、都会でもなければ、田舎でもない。都内までは電車で1時間も走れば行ける。でもこれと言って売りもない、ごく普通の町のありきたりな場所に建っている。俺はそんな町でそれなりに不自由なく育った

しばらくして学校につき、教室に入る。約1カ月ぶりの教室。木と埃の混ざったなんとも言えない匂い。見渡せば各席にはもうクラスの奴らが座っている。クラスメイトとはいえ、夏休みの1カ月の間、まったく顔を合わせない奴がほとんどだから、なぜかとても懐かしく感じる。

そんな中、懐かしさの欠片もない、よく見慣れた二人の男が話し掛けてきた。

『良ちゃんおはよ。』まだ声変わりをしていないような、細く高いトーンで俺を呼びながら右手を振っている。こいつの名前は『豪』名前とは逆に小さくて顔も女みたいで典型的なひ弱な感じの男だ。なぜか知らないがやたらと俺になついてくるのでなんだか憎めない

奴。いつもつるんで遊んでる中の1人だ。

『あーあ、良、お前そのまま来たのかよ！アホだねー。』豪の隣にいる男が、いきなり嫌味つたらしく声を掛けてくる。そうこいつもつるみ仲間の1人。名前は『雄太』。小学校からの腐れ縁で、幼なじみというか兄弟みたいなものだ。

”そのまま”とは俺のこの黄色い頭を指していったのだろう。夏休みにみんなで染めたのだが、こいつらはしっかり新学期前にカラス色に戻ってきてた。

『お前からこそ何真面目に頭直してきてんだよ！情けねー！』俺はとりあえず納得いかず言い返した。

『情けねえとかじゃねーよ！お前はホント馬鹿だね。どうせ教師たちにすぐ目え付けられるぞー！まあとりあえず今日は放課後呼び出しだねー。カッコイイ！』雄太は半分笑みを浮かべた憎たらしい顔をして言った。さすがにカチンときたが、俺は言い返さなかった。

雄太は頭がかなりキレル。テストでも、勉強なんかしないで俺たちとつるんでるくせにいつも上位だ！俺が口喧嘩で勝てるわけもない。それは分かりきっている

ついでに付け加えるなら、雄太は昔からサッカーをやっいて、それが地区の選抜にも選ばれるほどの実力だ。

最近俺たちと遊んでばかりで、部活もさぼり気味だ。しかし、それでも教師たちからの評価はたかかった。

おかげでその分俺たちの風当たりは、すこぶる悪かった。俺はそれが気に食わなかった。

”俺と雄太で何が違う。

勉強ができるだけで、部活に入ってるからって、俺らと遊んでいる時にやってることはなに一つ違うない” 別にそれで髪を直さなかったワケではないが、ただそういった価値でしか評価をしない大人たちが気に食わなかった。だから先公に呼ばれることは承知の上で、俺は俺を貫くことにしたんだ。

もう1人言い忘れていたが、仲間がいる。

そいつの名前はタクミ。こいつだけ隣のクラスなのだが、もう一言でいうとアホ！アホが服着て歩いているようなもんだ！俺もあまり人のことは言えないが。

雄太いわく、俺とタクミがタッグを組むと手に負えないらしい…。タクミとつるむようになったのは、2年になって最初の時、原因は覚えてないが、喧嘩になり、思いつきりやり合ったあと意気投合という、よくありきたりなパターン。

俺たちは大体はいつも、この4人で行動をしていた。

”キーンコーン、カンコーン…”

夏休みの思い出など、くだらないことをワイワイ話しているうちにチャイムが鳴り、担任の教師が入ってきた。

あえて名前は言わないが、嫌な教師の代名詞がよく似合う男だ。特に俺たちのような（世間から見れば、いわゆる不良）をこれみよがしに、嫌っていた。

雄太の期待を裏切ることなく、教師の鋭い視線は、まっさきに俺に突き刺し、同時にゆっくり口を開いた。『おい、藤枝、お前これ終わったら職員室にこい！』脂ぎった太い声がやけにカンにさわる。ついでに雄太がこつちを向いて笑っているのが、これまたカンに触った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4109a/>

あの日あの時あの場所で

2010年10月22日00時32分発行